

サーキュラーバイオシステム分科会

プロジェクト概要

背景	・食品メーカーや農業事業者は、事業の過程で出てくる廃棄物の処理に困っており、産業廃棄物としてコストをかけて処理している。 ・産業廃棄物処理事業者は、バイオマス残渣を、飼料・肥料、メタン発酵などの方法で処理しているが、あまり高く販売できないため、廃棄物処理費を高くせざるを得ない。		
課題	・様々な種類のバイオマス残渣について、できる限り高付加価値利用を実現するために、その残渣毎に最適な処理法を適用できる環境を整備できないか。		
目標	・全てのバイオマス残渣を資源に変える。 ・その仕組みを事業として持続可能なビジネスモデルとする		
問題意識・論点	・現在、どのようなバイオマス残渣が、どのくらいの量、どのようなところから発生しているのか。 ・それらのバイオマス残渣が、現在はどのような形で処理されているのか。もし、廃棄物として処理されている場合の引取り料はいくらか ・バイオマス残渣の処理の方法として、どのような方法が考えられるか（飼料、肥料、メタン発酵、バイオマス発電、熱回収、バイオリファイナリー、亜臨界処理＋メタン発酵やバイオリファイナリーなど）。 ・バイオマス残渣の回収方法として、あるところに集中して集めた方が効率的か、必ずしもあまりメリットはないか。 ・バイオマス残渣を一か所に集めて、そこで様々な処理方法を実施するコンビナートのようなもの（「サーキュラーバイオコンプレックス」（仮称））作ることによってメリットはあるのか。その場合の課題は何か。		
事業展望	2022年度 情報交換・テーマ絞り込み	2023年度 フィールド設定・ケーススタディ	2024年度 実証事業 （個別の事業化検討）

★本研究会開催日

目的

食品残渣・農業残渣などのバイオマス残渣の有効利用を進めるために、飼料・肥料、メタン発酵、バイオマス発電、熱回収などのこれまでの技術のほか、亜臨界処理水技術やバイオリファイナリー等の高付加価値化手法も含め、それぞれのバイオマス残渣に合わせた技術で有用物を社会に還元していく最適な仕組みを考える。

資料3-1-1

メンバー 38名(2022年8月8日現在)

氏名	所属	会員組織	会員
塩原 佑理	グリーン・サマル株式会社	○	○
伊原 智人	Green Earth Institute株式会社	○	○
麻生 義継	G-8 INTERNATIONAL TRADING株式会社	○	
中石 一弘	株式会社エックス都市研究所	○	○
高木 義信	日立造船株式会社	○	
伴 明浩	日立造船株式会社	○	○
若宮 和輝	日立造船株式会社	○	
山田 政彦	協業組合仙台湾掃公社	○	○
渡邊 貴典	株式会社タケエイ	○	○
高橋 大輔	シナネンホールディングス株式会社	○	○
影山 嘉宏	U&T環境株式会社	○	○
薩山 佳秀	Jバイオフーズリサイクル株式会社		
須沼 俊輔	株式会社富山環境整備	○	○
今井 麻美	株式会社富山環境整備	○	○
立野 嘉之	北陸ポートサービス株式会社	○	○
高野 治	株式会社リョーシン	○	○
高野 晃	株式会社リョーシン	○	○
河澄 秋芳	有限会社 峡南環境サービス	○	○
長倉 章夫	有限会社 峡南環境サービス	○	○
藤村 卓磨	株式会社オガワエコノス	○	○
町川 和倫	株式会社富士クリーン	○	○
鎌倉 秀行	株式会社エコマスター	○	○
見澤 直人	株式会社エコマスター	○	○
井上 海彦	オオノ開発株式会社	○	○
大島 権人	株式会社大島産業	○	○
前野 慶太	九州北清株式会社	○	○
梶原 成元	公益財団法人廃棄物・3R研究財団	○	○
青山 俊介	株式会社環境構想研究所	○*	○
清水 浩太郎	農林水産省	○*	○
西田 彰寛	農林水産省	○*	○
中山 育美	公益財団法人廃棄物・3R研究財団	○*	○
柚山 義人	一般社団法人日本有機資源協会	○*	○
内山 優	J T R 日本税制改革協議会	○*	○
小森 大輔	東北大学	○*	○

※オブザーバー

2022年度活動方針（案）

概要	・バイオマス残渣の排出状況の把握 ・バイオマス残渣の処理技術の把握。各処理方法の中でベスト（低コスト、高付加価値化）の技術の探索 ・「サーキュラーバイオコンプレックス」のメリット・デメリットの抽出。メリットがありそうな場合の場所の候補の検討				
概略工程	2022年8月	10月	12月	2023年2月	4月
	●8/1第1回分科会 企画検討・調整	★10/6 ②メンバー間情報交換、課題の検討	★12/6	★2/7 ③次年度検討内容検討	